「跡見」の古代

高橋　六二

古代語のひとつに「跡見」というのがある。しかしこれはアトミではなく、トミと訓む。

(1)　大伴坂上郎女、跡見庄より、宅に留まれる女子大嬢に賜ふ歌一首幷せて短歌

常世にと　吾が行かなくに　小金門に　もの悲しらに　念へりし　吾が児の刀自を　ぬばたまの　夜昼といはず　念ふにし　吾が身は痩せぬ　嘆くにし　袖さへ沾れぬ　かくばかり　もとなし恋ひば　古郷に　この月ごろも　ありかつましじ

（万葉集・巻四―七二三）

反歌

朝髪の念ひ乱れてかくばかりなねが恋ふれそ夢に見えける

（同　七二四）

右の歌は、大嬢が進る歌に報へ賜ふ。

(2)　典鑄正紀朝臣鹿人、衛門大尉大伴宿禰稲公の跡見庄に至りて作る歌一首

射目立てて跡見の岳辺の瞿麦が花　総手折り吾はもちてゆく寧楽人のため

（巻八―一五四九）

(3)　大伴坂上郎女、跡見田庄にして作る歌二首

妹が目を始見之埼の秋芽子はこの月ごろは落りこすなゆめ

（巻八―一五六〇）

吉名張の猪養山に伏す鹿の嬬呼ぶ音を聞くがともしさ

（同　一五六一）

ここには跡見庄と跡見田庄という地名が見られる。どちらもトミノタドコロと訓まれることが多く、同じ所を言っているらしい。大伴坂上郎女と大伴宿禰稲公とは姉弟である。平城京にいた大伴氏は

跡見に荘園を持っていたようだ。そこは現在の奈良県桜井市外山（とび）のあたりが考えられてきている。

(1)は母が娘を思う歌、「古郷」は跡見庄のこと、滞在は一ヶ月にも及ぶものだったようで、「吾が身は痩せぬ」も娘を「恋ひ」「念ふ」からばかりではなかったのだろう。農事の管理にも疲れていたはずである。(3)も同様の滞在時の作なのだろう。しかしこれは「秋芽子」「鹿の嬬呼ぶ音」とあるから、秋の収穫期の作であることがわかる。秋萩は散るなと言ったり、雌鹿を求める雄鹿の声に心惹かれているのは、稲の豊収を期待する心からかもしれない。都人が農事を踏まえて季節を詠むところから、日本の抒情歌はひとつの展開を見せる。

(2)もナデシコの花を歌っているから、秋季の作。この歌の表現で注目されるのは、「射目立てて跡見」といっている部分である。同様の表現は、

(4)　（山部宿禰赤人が作る歌二首幷せて短歌）

やすみしし　わご大王は　み吉野の　飽津の小野の　野の上には　跡見すゑ置きて　御山には　射目立て渡し　朝獵に　ししふみ起し　夕狩に　とり踏み立て　馬並て　御獵そ立たす　春の茂野に

反歌一首

あしひきの山にも野にも御獵人さつ矢手挟みさわきてあり見ゆ

（巻六―九二六）

（同　九二七）

のようにもある。神亀二（七二五）年五月、聖武天皇の吉野行幸時の狩猟儀礼歌である。ここでは「跡見」と「射目」が対の表現になっている。つまり「跡見」は普通名詞で、狩猟の際に獣の跡を見て居場所をつきとめる役の者をさしている。「射目」も狩りの時に、射手が姿を隠して獲物を射るときの、柴などの遮蔽物である。ともに狩猟用語だったのである。「跡見」の者は当然、遠くまで目の利く者でなければならなかったろう。(2)の場合はその「射目」と「跡見」とが対の関係ではなく、「射目立てて」が「跡見」を修飾、説明する関係にある。だから「射目立てて」を「跡見」の枕詞とする注釈もある。いずれにしてもここの「跡見」は狩猟語が地名に重なっていく様を示している。

紀朝臣鹿人はもう一首、「跡見」の歌を残している。

(5)　紀朝臣鹿人の、跡見の茂岡の松の樹の歌一首

茂岡に神さび立ちて栄えたる千代松の樹の歳の知らなく

（巻六―九九〇）

いわば松ぼめの歌である。しかしなぜこの松がほめて歌われなけ

ればならなかったのかはわからない。「茂岡」は地名というよりも、草木などが茂った岡というのだろう。あるいは(4)の場合の「茂野」と同じ言い方だったとすると、「茂岡」も狩場だということなのかもしれない。それならこの松がほめられるのも、豊猟を期してのものと見ておくことはできる。

万葉集にはさらに一首、「跡見」が歌われている。

(6)　(冬相聞　雪に寄す)

うかねらふ跡見山雪のいちしろく恋ひば妹が名人知らむかも

(巻十―二三四六)

跡見山の雪が「いちしろ」いことを言って妹へのいちしろい恋を歌っている。その「跡見」をいうのに、今度は「うかねらふ」とある。これは狩の時に獲物を窺い狙う意の語でおのずからに「跡見」の職性を示している。「跡見」にはやはり狩猟がついてまわるのである。この歌の作者は未詳、つまりそれほど広く誰にも、「跡見」という語は狩猟用語として定着していたということである。

この「跡見山」は桜井市外山の鳥見山が相当するものと考えられている。しかしまた奈良県宇陀郡榛原町の鳥見山かともいう。神武紀には鳥見山に霊畤を立てて皇祖天神を祭ったとあり、この場合は桜井市のそれとする。地名としては他に、鳥見(神武紀)・迹見池(垂仁紀)・迹見駅家(天武紀)・登美郷(続日本紀・和銅七年)・登美(続日本紀・宝亀四年)・鳥見丘(常陸国風土記)、それに等弥神社(延喜式)もある。

神名・人名にも登美能那賀須泥毗古・登美毗古・登美夜毗売(以上、神武記)・鳥見屋媛(神武紀)・迹見赤檮(用明紀・崇峻紀・聖徳太子伝略)、登美首・登美真人・登美連・止美連・鳥見連(以上、新撰姓氏録)などが見られる。この内、迹見赤檮の場合は、物部守屋等を殺した射手として有名である。

さて「跡見」をトミといった場合のトは足跡の意である。古代語にもアトはある。そのアは足、トは所かという。「跡見」はトミであってもアトミであつても、足跡を見ることに長けていたことがわかる。なお、アトのトは甲類、トミのトは乙類だが、アトのトは早くに甲乙両類の別が失われたというから、トミとアトミの違いはないと見てよかろう。

本学の創立五十周年を祝う機会に、校名の始原を素描してみた。跡見学園はやはり、創立以来の足跡を見定め、遠く未来を見極める眼を持ち続けたい。